

## 保 育

# 道徳性の芽生えを育むための教師のかかわり

広 兼 睦

## Teachers' interactions developing children's germs of morality

Mutsumi Hirokane

The purpose of this study is to discuss and clarify what effective teachers' interaction are in order to develop children's germs of morality. It mainly focuses on interactions between teachers and children and examines effective teachers' interactions to develop children's germs of morality by recording episodes of children whose germs of morality seemed to be developed. This study clarified that four types of teachers' interactions were important: 1. teachers' interactions closing to changes of children's minds, 2. teachers' interactions conveying the importance of what the children cannot directly see, 3. teachers' interactions receiving what children really think, 4. teachers' interactions recognizing the children facing what they think. In addition, the researcher considered that not only teachers' direct interactions with them but also "teachers' senses of values" would have a lot to do with developing children's germs of morality. In further research, the researcher clarifies teachers' roles which are important for raising children's germs of morality with wider perspectives. (p.35-40)

### 1 はじめに

文部科学省調査研究協力者会議の報告では、「現代の子どもの成長と徳育をめぐる今日的課題」として、「他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ち、生命の尊重・人権尊重の心、正義感や遵法精神の低下や、基本的な生活習慣の乱れ、自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下」<sup>1)</sup>などの傾向が指摘されている。また、近年の幼児の育ちについても、中央教育審議会答申(2005)においては、「基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、他者とのかかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない」<sup>2)</sup>など示されており、先ほども述べた徳育をめぐる課題と類似しているような課題が指摘されている。

幼児期の徳育については、「道徳性の芽生え」として考えられており、今までは幼稚園教育要領

の領域「人間関係」の内容の取扱いの中で“道徳性の芽生えを培うことについて”が一部のみ記されていた<sup>3)</sup>。しかし近年、幼稚園教育要領の改訂に向けて出された「幼児教育部会における取りまとめ(案)」において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目あげられており、その中の1つに「道徳性・規範意識の芽生え」が項目の1つに記されている<sup>4)</sup>。

現代の子どもたちの課題から考えられるように、これからの社会の変化に伴って幼児期の子どもたちに“道徳性の芽生え”を育むことは、大変重要であると考えられる。

本園の5歳児の4, 5月頃の子どもの姿を見ても、友だちとトラブルがあると嘘をついてごまかそうとしたり、謝ることですぐに解決しようとするなどの子どもの姿が一部で見られていた。その為、保育の中で子どもたちの心をしっかりと育んでいきたいと考えた。

そこで本研究では、5歳児の“道徳性の芽生え”に着目し、“道徳性の芽生え”を育むために有効な教師のかかわりとは何かについて明らかにすることを目的とする。

## 2 道徳性の芽生えとは

1でも述べたように幼児期の子どもたちの“道徳性の芽生え”として、幼稚園教育要領とその新たな改訂に向けた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の2つについては、以下のように“道徳性の芽生え”として記されている。

### (1) 幼稚園教育要領の領域「人間関係」<sup>5)</sup>

ねらい[3]: 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける

内容[9]: よいことやわるいことがあることに気付き、考えながら行動する

### (2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」<sup>6)</sup>

[4] 道徳性・規範意識の芽生え

してよいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するようになり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、決まりを守る必要が分かり、決まりを作ったり守ったりするようになる。

(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、“道徳性”だけでなく“規範意識”についても記されているが、『大辞泉第三版』では“道徳”という語について、「①ある社会の中で、人々がそれによって善悪・正邪を判断し、正しく行為するための規範の総体。法律とは違い外的強制力としてではなく、個々人の内面的原理として働くものをいい、また宗教と異なって超越者との関係ではなく人間相互の関係を規定するもの」<sup>7)</sup>と記されている。さらには、“規範意識”について『デジタル大辞泉』では「相対的な現実の価値判断を超えて、あらゆる評価に対し普遍的・絶対

的な価値を規範として妥当させ、かつ担う意識<sup>②</sup>ある対象について価値判断を下す際、その前提になっている価値を価値として認める」<sup>8)</sup>と記されている。

したがって、(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として記されている「道徳性・規範意識の芽生え」の子どもの姿については、どちらも共通して育むための素地となる姿だと考える為、幼児期の段階でこれらを分けきすることは難しいと考える。

これらのことを踏まえて“道徳性の芽生え”を育むために“よいこととわるいことの判断”をキーワードとし、本研究での5歳児の“道徳性の芽生え”が培われている子どもの姿を以下のように設定することとした。

してよいことやわるいことが分かり、自分の気持ちを調整し、相手と折り合いをつけながら考えて行動する子ども

## 3 研究方法

### (1) 対象児

年長組5歳児33名(男児18名 女児15名)

### (2) 期間・場面

平成28年6月～12月

園生活1日の中での場面

### (3) 方法

子どもたちの日々の様子の中から道徳性の芽生えが育まれていると思われるエピソードを記録する。そのエピソードを、子どもの姿と教師のかかわりを中心として分析を行い、道徳性の芽生えを育むにあたって教師のかかわりとしてどのようなかかわりが有効かを明らかにする。

## 4 実践事例

### 実践例1 「順番抜き」(9月)

#### <背景>

トイレの順番を並んでいるそばでA児とB児が言い合いになっている様子に気づいた教師はそつと近づき声をかける。

「Aくん、Bくん、どうしたん？何かあったん？」と教師が尋ねるとそつと怒った表情でB児が「ぼくがさきにならんでたのに、Aくんがぬかしてきた！」と訴えてくる。それを聞いたA児もすかさず「ちがうよ！おれがさきにならんでたのに、Bくんがぬかしてきたんよ！」と声を張り上げて言う。「そつかー。どつちも抜きかされたって思ったんかなー？」と教師が尋ねると「違うよ！Aくんがうそついとんよ！うそついたらダメなんよ！」と言う。するとA児も「うそついでないし！じぶんがうそついとるんじゃんか！」と言い返す。「困ったね～。先生見てなかったから、どつちが本当かなんてわかんないもんね～。周りにいたお友だちは知らない？」と困ったように教師が周りにいた他の子どもたちに声をかける。「おしゃべりしよったけん、どつちがさきはみてなかった」とC児が答える。「そつかー。それは困ったね～。どうしようかね」と教師が尋ねると「じゃあ、ジャンケンで決めるのは？」とC児が提案をする。それを聞いたA児は「じゃあ、ジャンケンで決めよう」とその提案に乗るが、B児はその提案に乗る気ではない表情をしている。それを見た教師が「そつだね～。順番をジャンケンで決めるものいいかもね。でも、もし2人の中で嘘をついて抜きかされてる友だちがいるなら、それって抜きかされている人からしたらとっても悲しいことだよ」と少し悲しそうな表情でいう。さらに続けて「もしね、今日はジャンケンして順番決めてもいいけど、嘘つきをいっぱいしていると今度は、本当のこと言ったときにも“どうせ〇〇くんは嘘をついてるから”って思われて、どんどんお友だちに信じてもらえなくなっちゃうし、今のみんなのピカピカ光っている心がどんどん黒くなって、真っ黒の悪い心だけになってしまうよ。先生、きく組さんの中にそんな心が真っ黒なお友だちがいたら悲しいな。」と投げかける。するとB児はすぐに「ぼくはうそついでないもん」と訴える。それを聞いたA児は黙って教師の顔を見ている。「先生は見て

ないから抜きかしたかどうか分からないけど、もし自分で気づいているなら、きっと今きちんと伝えることで心が光ってくると思うけどな～」と教師がA児を見ながら話をする。しばらく沈黙が続いた後A児が「えつとね。さいしょはね、おれがうしろだったんだけど、Bくんがちよつとずれたけんまえにいったんよ」と小さな声で話をする。それを聞いた教師は「あー！そつだったんだあ～！どうして、ずれてたから前にいったの？」と尋ねると「さきにいきたかったから」とうつむき加減で答える。「先にいきたかったんだね。そつか～。そつだったんだつてBくん」と教師が言うつとBくんが少し納得した様子でA児を見る。「先生、見てなかったからわかんなかったけど、今、Aくんが先にいきたかったからぬかしてしまつたよつて教えてくれたから、どうして2人がもめてたのかがよくわかつたよ。ドキドキしながらもきちんと正直に話してくれたんだよね。先生、嬉しがつたよ。ありがどう」と教師がA児に伝える。するとA児は、「ごめんね」と穏やかな表情でB児に謝る。B児も納得した様子で「いいよ」と嬉しそつに答える。

#### 【考察】

A児は、教師と話をしつていく中で、B児との間に起こつた出来事と自分の気もちつと向き合つ、そして考へた結果、正直な思つを伝へたのだと考へる。これは、教師がA児やB児の話を聞きながら、言葉や内容や表情から子どもたちの心の動きを読み取り、その心の動きに寄り添つて言葉かけをしたから、このよつなA児の姿につながつたのだと考へる。

また、A児が穏やかな表情で自分からB児に謝る姿から、A児は正直に話をしつてよかつたと感じてると考へる。これは、教師が嘘をつくことについて話をしたり、正直に話をしつてくれて嬉しがつたことについて伝へたりしたから、このよつなA児の姿につながつたのだと考へる。

### 実践例2 「泥団子壊しちやつた」(11月)

#### <背景>

お帰りの時間に泥団子名人からもらつた泥団子が欠けてることを教師が見つける。クラス全員に問ひかけるとA児とD児が関係しつていたことが分

かる。教師はA児とD児を呼び、話をする。

「どうして、泥団子が欠けてしまったのかな？」と教師が尋ねる。「はじめにAくんがもってて、そのあとにDくんに渡そうとしたら泥団子が落ちて、途中でキャッチしたけど、こわれてしまった」とD児が説明をする。「そーだったんだね。教えてくれてありがとう。きちんと説明してくれたから、どうして欠けたのかはよく分かったよ。でも、どうしてその時に先生に伝えなかったのかな？」と教師がさらに問いかける。A児とD児は黙ったまもうつむく。「後から先生知ったから、なんだかすごく悲しかったな」と教師が言う。申し訳なさそうな表情でA児とD児は教師を見るが黙ったままである。教師は続けて、「この泥団子、泥団子名人が幼稚園のみんなにっくたさった泥団子だからね。幼稚園のみんなの泥団子が壊れちゃったことになるんだよ」と教師が言う。するとA児とD児が「ごめんなさい」と謝る。「どうして、ごめんなさいなの？」と教師がゆっくりと尋ねる。「勝手に触っちゃいけない泥団子に触って壊したから」とD児が答える。「そうだね。勝手に泥団子触って壊してしまったことはよくなかったよね。でも、先生はもう一つよくなかったなっと思ったことがあるよ」と教師が言う。「黙ってたこと」とD児が答える。「どうして黙ってたのかな？」と教師が尋ねる。するとD児が「壊れてしまっいけないと思ったから」と答える。「そっかー。誰にでもやってしまった！ってことはあると思うんよ。でもその時に、すぐに先生にごめんなさいって教えに来てくれるのと、黙ってばれなかったらいいやっしてしてしまうのでは全然違うよね？二人はどっちがいいと思う？」と教師が尋ねる。するとA児が「黙ったままにするんじゃないで、すぐに先生に言いに行く」と答える。「そうだね。先生もそっち方がいいと思うな。壊してしまった後にどうしたら壊れなかったのかな？壊われた泥団子はどうしようかな？って自分たちで次に向けて考えていくことも大切だからね」と教師が答える。2人は黙ってうなずく。「じゃあ、この壊れてしまった泥団子どうする？」と教師が再度尋ねる。「みんなに謝る」とD児が答える。「そうだね。じゃあ、欠けてしまった泥団子はどうする？」と教師が尋ねると「自分たちで壊れたところを直す」とD児が答える。「上手く直せるのかな～。とりあえず、もうお帰りの時間でみんなに謝りにはいけないから、副園長先生に今日のことを自分たちでお話しに行こうかな」と言う。その後、3人は副園長のところへ向かう。副園長との話の中で、経緯

を話して謝った後、泥団子名人に直し方を聞くこととなる。

後日、自分たちで泥団子名人につくり方を聞いたが、欠けたものは直せないということを見せてもらう。翌日から泥団子名人からももらったピカピカの泥団子を、幼稚園に返すために毎日泥団子づくりに励む。



図1「泥団子づくりをする子どもたち」

#### 【考察】

教師は、A児とD児がみんなの泥団子を壊してしまったことだけに着目して話をするのではなく、“黙っていたこと”に対しても思いが向くようにかかわっていった。そうすることで、子どもたちの中で壊したことの事実だけでなく、“黙っていたこと”について“よいことかわるいことか”を考えるきっかけになったのではないかと考える。

また、その後も副園長や泥団子名人と話をし、子どもたちの思いを受け止めながらも一緒になってどうしたらいいかを考えていけるようにかかわることで、その後も自分たちから進んでコツコツと泥団子づくりをする姿につながったのだと考える。

#### 実践例3 「椅子、片付け忘れちゃった」(12月)

##### 〈背景〉

教師が次の活動があるため、「椅子を片付けて集まってね」とクラス全体に声をかけるが、数人が椅子を片付け忘れのまま集まっている子どもがおり、椅子が残っている状態だった。

「あれ～？何個か椅子が残っているけど、誰か片付け忘れてる子いない？」と全体に声をかける。しかし、子どもたちは「ええ！自分の椅子片付けたし～」と自分には関係ないと口々に言いながら動こうとしない様子である。「そっかー。残念だな。忘れることは仕方ないし、先生もよく忘れることあるからね。でも、あとからでもあっ！て自分で気がついて動くことの方が大切だと思うよ。誰か椅子忘れてたなって人、本当にいないの？」と教師が改めて尋ねる。するとしーんと静まり返った中で、A児がさっと手を挙げる。「どうしたの？」と教師が尋ねると「椅子片付けるの忘れてった！」とA児が答える。するとそれを見ていたD児も「ぼくも…」と手を挙げる。「そうなんだ！でも、すごい！今、みんなは自分に関係ないって感じだったけど、A君とD君はあっ！て自分で気づいて、今、勇気を出して手を挙げたんだよね。みんなの前で正直に手を挙げるってなかなかできないことだよ。先生でもドキドキすると思う。えらいね。じゃあ、椅子片付けるの忘れてたの気づいたら、そのあとどうしたらいいと思う？」と教師が尋ねると「椅子を片付ける」と2人は答える。「そうだね。じゃあ、椅子を片付けに行ってきたおいで」と教師が答える。2人は満足そうな表情で椅子を片付けに行く。そのやりとりを見ていた片付け忘れていた子どもたちも、椅子を片付けに行く。

### 【考察】

教師の言葉かけから、A児とD児は自分自身の事だとして捉え、静かな雰囲気の中で自分から進んで教師に思いを伝えることができていた。これは、実践例1や実践例2のように教師が自分の思いと向き合えるようなきっかけを作ったり、子どものありのままの思いを受け止めたりする積み上げがあるからこそ、実践例3のような姿につながったのだと考える。また、教師に思いを受け止めてもらえるという安心感や信頼関係があったからこそクラスの前で自分から進んで素直な思いを伝える姿につながったのだと考える。

## 5 実践を終えて

実践を積み重ねる中で、子どもたちの“道徳性の芽生え”を育むために有効な教師のかかわりについて、次のようなことが大切だと考える。

### (1) 子どもの心の動きに寄り添った教師のかかわり

実践例1より、教師はA児とB児の思いをそれぞれ受け止めながらも、それぞれの発した言葉やその時々表情などを受け止め、子どもの見えない心の動きを読み取っていた。すぐに「嘘をついてないもん！」と否定をしたB児に対し、黙って教師を見るA児の姿から、教師はA児が自分自身の心と葛藤しているのだと考えた。

そこで、揺れ動いている気もちに再度、自分自身の気もちと向き合えるように言葉かけをすることで、A児が本当のことを話そうという気もちへと変わっていったのだと考える。

このように、教師は子どもたちの心の動きを読み取り、その心の動きに寄り添ったかかわりをしていくことが、子どもたちが自分の心と向き合えるきっかけとなり、してよいことやわるいことを自分で振り返られるようになるのだと考える。

### (2) 目に見えないものの大切さを伝える教師のかかわり

実践例1より、C児が「ジャンケンで決めたら？」と新たな提案を出してくれたのだが、教師は、嘘をつくことはよくないことだと感じてほしいと思い、自分の思いと向き合えるような言葉かけを行った。そうすることで、ただジャンケンで解決をするのではなく、自分の思いに向き合って考えるきっかけになったのだと考える。

さらに、教師は子どもたちに嘘をつくことがよくないことと気づけるように、「“どうせ〇〇くんは嘘をついてるから”って思われて、どんどんお友だちにも信じてもらえなくなっちゃうし、今のみんなのピカピカ光っている心がどんどん黒くなって、真っ黒の悪い心だけになってしまうよ」

などと、子どもたちにとって分かりやすい例えを使いながら伝えている。

そうすることで、子どもたちにとって嘘をつくということに対して、よいことなのかわるいことなのかの判断となり、またそれがさらにその後の価値観の形成につながっていくと考える。

### (3) 子どものありのままの思いを受け止める教師のかかわり

実践例1，実践例2より，教師は事実を探りながらも，否定的に子どもたちを見るのではなく，嘘をついたり，ごまかしたくなってしまうりする子どもの思いを受け止めながら，事実と自分の思いに向き合っていくように言葉かけを行っている。なぜなら，否定的にとらえてしまうと子どもたちは大人から見たいい子になろうと，ますます事実と自分の心とに向き合えなくなってしまうからである。

このように，嘘をついてしまった素直な子どもの思いや一方でそれをよくないと感じている子どもの心の動きなど，ありのままの思いをしっかりと受け止めていくかかわりを積み上げていくことで，やがて実践例3のA児とD児のように自分の気持ちを調整し，相手と折り合いをつけながら考えて行動する子どもへとつながっていくのだと考える。

### (4) 自分の思いと向き合った姿を認める教師のかかわり

実践例3より，A児とD児が緊張しながらも教師に正直な思いを伝えた姿をしっかりと認める言葉かけをすることで，子どもたちは正直に話をしよかったという思いから，満足そうに椅子を片付けに行く姿へとつながったのだと考える。

このように，子どもが自分の思いと向き合えるようなきっかけづくりや思いと向き合った姿をしっかりと認めていくことで，やがて“よいこととわるいこと”の判断の素地となったり，さらにはその判断から行動につながっていったりするのだと考える。また，これらは1日で確立されるも

のではなく，実践例1や実践例2のような積み上げを日々行っていくことが，やがて実践例3のような素直に自分の正直な思いを進んで相手に伝える姿につながるのだと考える。

## 6 おわりに

道徳性の芽生えを育むための有効的な教師のかかわりとして4点が明らかとなった。また，“道徳性の芽生え”は，すぐに育まれるものではなく，日々の積み上げが大変重要であると感じた。さらに，エピソード記録を分析していく中で，教師のかかわりの直接的な子どもへのかかわりだけでなく，“教師の価値観”というのも大きく関連してくるのではないかと考えた。

今後は，道徳性の芽生えを育むための教師と子どもの直接的なかかわりだけに限らず，広い視点をもって，子どもたちの道徳性の芽生えを育むために重要な教師の役割について明らかにしていきたい。

### <引用文献および参考文献>

- 1) 文部科学省調査研究協力者会議等(報告):「現代の子どもたちの成長と徳育をめぐる今日的課題」, 2009.
- 2) 文部科学省中央教育審議会答申:「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」, 2005.
- 3) 文部科学省:「幼稚園教育要領」, p. 102, 2008, フレーベル館
- 4) 文部科学省:「幼児教育部会における取りまとめ(案)」2016.
- 5) 前掲書3)
- 6) 前掲書4)
- 7) 松村明:「大辞林第三版」, <https://kotobank.jp/word/%E9%81%93%E5%BE%B3-103962>
- 8) 松村明:「デジタル大辞泉」, <https://kotobank.jp/word/%E8%A6%8F%E7%AF%84%E6%84%8F%E8%AD%98>